

OSCE 対策に終始しがちであること、卒後教育では、活用領域が限られ若干専門性の高い内容で特定の施設、団体が中心となっていることが挙げられる。看護教育においては、米国のプログラム開発手法の導入などが進められている一方、教育環境は施設による隔たりが大きいといった点が挙げられる。

このように各教育分野それぞれの課題はあるものの、まずは相互の情報共有と連携を図るという観点から、関連学会同士の連携を図ることとした。日本シミュレーション医療教育学会、日本医学シミュレーション学会、日本看護シミュレーションラーニング学会、日本医療教授システム学会、そして、普段は接点の少ない機械工学系の諸学会などとの連携を、当部会の委員らを介して推進していく。

With コロナにおいて、シミュレーション教育は、あくまでも教育方略であるということ

再認識させられる。従来、まずシミュレーション教育ありきで、いかにシミュレータを活用するかという視点で語られることが多かった。そうではなく「感染症対策、あるいは医療安全といった教育のニーズが先にあり、患者に対面で接しながら教育ができないという制約が加わった場合に、その解決の策としてシミュレーション教育が活用できないか、その場合、どのように学修成果を評価するか」という道筋で考えるという教育学の原点に立ち返ることが求められる。例えば、医療安全教育に焦点を当て、先述の各学会がその特長を生かした教育プログラムを提供する、シミュレータを共同開発する、そのような取り組みが今必要であると考えられる。

副部会長：石丸裕康、部会員：稲盛正彦、川原千香子、駒澤伸泰、浅田義和、橋本卓弥、早坂明哲、担当理事：藤倉輝道、石丸裕康

*1 Subcommittee of Simulation-Based Education

*2 Terumichi Fujikura

18. ICT 教育部会*1

椎橋 実智男*2（部会長・埼玉医科大学 IR センター）

ICT (Information and Communication Technology) の進歩、SNS (Social Networking Service) とそれらを利用するためのスマートフォンやタブレットなどのデバイスの急速な普及は、社会はもちろんのこと、医学教育にも大きな影響を及ぼしている。特に、生まれたときからインターネットが普及しており、幼いころからスマートフォンに触れてきた「Z 世代 (generation Z)」と呼ばれる世代が医学教育を受けるようになった現在、医学教育と ICT との関係に大きな変革が起きようとしている。

折しも 2020 年春からの COVID-19 の拡大に

よって、医学教育は良くも悪くも大きな影響を受けた。最も大きな良い点は「遠隔でもかなり医学教育ができる」「ICT を活用すると今までより良い医学教育ができる」ことに否応なしに気づかされたことであろう。

ICT 教育部会は、上記の状況を踏まえ、ICT を活用した医学教育を推進することを目的に第 21 期から設置され、ICT 関連の機器・システムやそれらの活用方法に精通した部会員で構成されている。当部会の初回の会合は COVID-19 の拡大只中の 2020 年 12 月 15 日に第 1 回が開催されてから、2021 年 11 月 4 日の第 7 回まです